COMING SOON!

『Shall we ダンス？』アメリカを行く

周防正行

太田出版

著者プロフィール

周防正行

すおう・まさゆき

1956年、東京生まれ。映画監督。
脚本・監督作品に『変態家族 兄貴の嫁さん』『ファンシイダンス』『シコふんじゃった。』『Shall weダンス？』がある。また、小説に『シコふんじゃった。』(太田出版・集英社文庫)『Shall weダンス？』(幻冬舎)、ロングインタビューに『Shall weダンス？ 周防正行の世界』(ワイズ出版)がある。

『Shall weダンス？』アメリカを行く

1998年2月3日　初版印刷

1998年2月14日　初版発行

1998年3月30日　第5刷発行

著者――― 周防正行

カバーイラスト― 茂利勝彦

ブックデザイン― 鈴木成一デザイン室

映画写真提供――― 大映株式会社

発行者――― 落合美砂

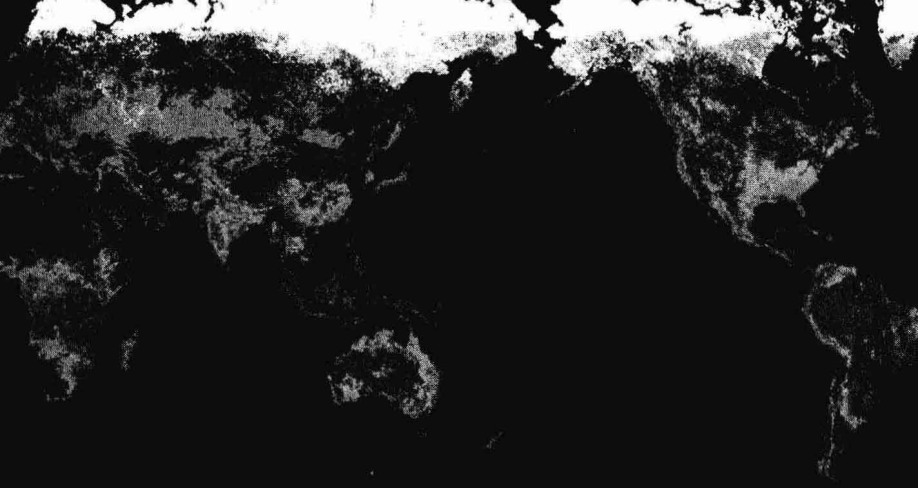
発行所――― 株式会社太田出版
〒160-8571 東京都新宿区荒木町22エプコットビル1F
電話03-3359-6262　振替00120-6-162166

印刷・製本――― 中央精版印刷株式会社

©1998,Masayuki Suo,Printed in Japan.

ISBN4-87233-375-6 C0095

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。本書の無断複写・複製・転載を禁じます。



『Shall we ダンス？』アメリカを行く

第一章 マーケットリサーチ

東京▼爆弾ヤンキー娘、現る 8
ニューヨーク▼アンケートが映画を変える!? 14
ニューヨーク▼宣伝コンセプトは、映画界の野茂英雄 23
東京vsニューヨーク▼ハーヴィー・シザーハンズ 38
ニューヨーク▼アメリカ流契約の罠 59
東京▼アカデミー賞外国語映画賞、日本代表ならず 70
ソルトレイクシティ▼サンダンス映画祭は、大盛況 73

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

93

第二章 第一次キャンペーン

東京▼落ちつかぬ日々 94
ニューヨーク▼地獄のスケジュール 104
ダラス▼ラテンダンサーはいった。「あの背中の十字架が欲しい」 123
ヒューストン▼テキサスはアメリカからの独立を考えています 128
セントルイス▼日本語で喋ってもよござんすけど 135
サンフランシスコ▼困るんだよな、こんな質問 152
ロサンゼルス▼キムタクも乗ったリムジンで野茂観戦へ 161
サンディエゴ▼心の底から叫んだ。「いいかげん帰してくれ――!」 179

第三章 第二次キャンペーン 195

東京▼ころころ変わるスケジュール 196
シアトル▼待遇改善 197
バンクーバー▼巨泉の街 210
ポートランド▼「こんにちはオレゴン」ってどんな番組？ 216
ミネアポリス▼ミネソタの卵売り 223
シカゴ▼ホワイトソックスのフランク・トーマスは凄い 231
ニューヨーク▼実は窒息しそうな街だった 242
ワシントンD.C.▼家にきちんと帰る杉山は、日本のサラリーマンじゃない 247
アトランタ▼CNNとコカコーラと日本企業 255
マイアミ▼マイアミビーチはオババとオジジ 261
デトロイト▼『うなぎ』の影響 280
モントリオール▼ムッシュ・ドーナッツ 290
トロント▼ドンデン返し 302
東京▼ただいま 317

第四章 全米公開 321

ロサンゼルス▼タキシードにシースルーの黒シャツなんて 322
ニューヨーク▼ライザ・ミネリはいった。「ダンスもうまいのね」 325
シカゴ・デトロイト・カンザスシティ▼封切り興行成績、『ニュー・シネマ・パラダイス』を抜く 343
ロサンゼルス▼アカデミー賞ノミネート作戦開始 365
『Shall we ダンス?』興行成績・イン・アメリカ
『Shall we ダンス?』受賞リスト・イン・アメリカ 409
おわりに 410

補章 『Shall we ダンス?』ヨーロッパを行く・ロンドン編 377

第一章

マーケット

リサーチ

「結婚するなら、ユダヤ人の富豪の一人娘しかないでしょ」

かつて「結婚する気はないの？」と聞かれると、よくそんな風に答えていた。もちろんそれは冗談だったのだけれど、まるっきりの嘘ではなかった。冗談というのは、それを本気でいわせてしまうような状況もあるからこそ出るものだからだ。

つまり、日本人がハリウッドで成功するには、ユダヤ人の身内とならない限り絶対に不可能である、という絶望感が少なからず僕にはあったのだ。とはいうものの、僕にはハリウッドで絶対に成功するのだという野心があるわけではなかった。もしかしたら将来、アメリカで何らかの形で自分の力を試すような時期がくるかもしれないと、漠然と考えていただけである。

しかし、その漠然と考えていた将来は、僕が日本人とまさかの結婚をした直後、突然やってきたのだった。

東京／爆弾ヤンキー娘、現る

「私があなたの発見者です」

目の前に座った茶髪のおねえちゃんはそういうとニッコリ笑った。茶髪といっても、目も茶色だし、英語だし、本物のヤンキーだ。

「発見されなくても、ここにいたし、これからもいるつもりなんですけど」

そう一言、返してやりたいところだったが、文字通り茶色の目に浮かぶ茶目っ気に、こんな皮肉が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

通じるわけがないと諦めて何もいわずに苦笑した。だけどアメリカ大陸が発見されなければ、先住民ものんきに生きていけたかもしれないんだからね。勝手に発見して、そっちの都合で乗り込んでこられても相手が迷惑するかもしれないんだからね。

一九九六年四月二十四日、午前八時半、帝国ホテルのティーラウンジに呼び出された僕は、映画先進国アメリカからの使者を目の前に少し斜めに座っていた。

トランジスタ・グラマー、あまりにも古い表現なので気が引けるのだが、まさにそうとしかいい様のない、はちきれんばかりの若さを持った（それでも初対面のまだどんな奴かも分からない僕に対しては、はやる気持ちをいささか押さえ気味にしているようにも見える）「僕の発見者」はアメリカの映画製作配給会社ミラマックスに勤める二十六歳のユダヤ系アメリカ人で、名前をエイミー・イズラエルといった。オーストラリア出張の帰りに、どうしても僕に会いたい、どうしても『Shall we ダンス？』が欲しいと、日本に立ち寄ったのだという。

ほんとかいな、と斜めの僕は素直じゃない。

でも本当にいきなりだったのだ。前日大映の海外担当である森吉治予さんから連絡があって、明日の朝、時間を作ってくれというのだ。こっちとしては『Shall we ダンス？』が海外でどういう状況にあるのか分からず、ましてや僕自身に映画を売る権利がない以上会ってどうする、一体何の話があるのだ、という感じだった。

●「Shall we ダンス？」の発見者、ミラマックスのエイミー・イズラエル。この写真は、後のニューヨークのプレミアで撮影。

多分ここで説明しておかなければならないことがある。僕は映画『Shall weダンス?』の原作者であり、脚本家であり、監督であるにもかかわらず、一切の商業的な権利を持っていないのである。なぜなら僕は原作者であり、脚本家であり、監督ではあるけれども、一銭の金も出資していないからだ。この金を出した者だけが一切の権利を持つという、奇怪な原則こそ、日本映画が後生大事にしているルールなのだ。

『Shall weダンス?』の例をあげよう。この映画の出資者は大映、日本テレビ、博報堂、日本出版販売の四社で、その窓口に大映がなっている。企画・制作は僕自身が所属しているアルタミラピクチャーズという会社が担当した。つまり、企画から作品完成までのあらゆる実務的責任をアルタミラピクチャーズは負っているわけだ。しかし、僕を含めてアルタミラピクチャーズは、金を出資していないから、何の権利もない。

繰り返すが、日本映画界の場合、アイデアに権利や価値を認めてくれることはほとんどない。権利は金を出した者にある。それなら監督自身にあらゆる権利が残るように契約をすればいいんじゃないのといわれそうだが、『Shall weダンス?』を作る前の僕には、「金は出さないけれど権利を持てる」という契約を結べる程の力はなかった。当然、何の実績もないアルタミラピクチャーズという会社にも。つまり、僕がいい出しっぺとなってアルタミラピクチャーズが提出した企画に対して大映は、うちが金を出すから撮らせてあげましょう、だけどできた映画のあらゆる権利は金を出したこちらにあるんだからね、という条件で製作を約束したのだった。

ここで僕が、完成した映画に対する権利（例えば利益においてなら、日本での上映の売上げや海外

での上映の売上げに対して出資者と同等の権利）を主張したら、だったらこの映画には出資しないと大映はいっただろう（現に、『シコふんじゃった。』の時に感じた海外セールスに対する不満から、次は失敗してもいいから自分たちの手で積極的にやりたいと、いくらかでも出資して海外配給権だけは押さえようとしたのだが、大映は首をたてにふらなかった。とにかく権利を分散させたくないのだ）。

つまり僕は大映にお金を出していただいて、自分の撮りたい映画を撮らせていただいたのだから、完成した映画の権利を欲しがりません、ということで映画を作ることができたのである（だったら他の会社に持っていけばいいじゃん、と思うだろうが、日本の映画界のしがらみの中にあっては、それもなかなかままならなかったんだな、これが）。

まあ、映連（日本映画製作者連盟）が、当然、原著作者にあると定めた二次使用に関する権利（例えば国内でのビデオの著作権や、どこかの誰かがリメイクをしたいといってきたらその決定権は原著作者本人にある等）は、大映は認めざるを得ず、二次使用に関しては何がしかの印税は僕の懐に入ってくるようになっている。そしてしつこく交渉した末、やっと成功報酬という名目で、僕が所属するアルタミラピクチャーズに国内での純利益の数パーセントが入ってくることになった。

だけど、これは国内だけに関してで、海外においては相変わらず、何の権利もない。外国でオリジナル映画がどんなにヒットしても、ビデオがどんなに売れても、それに準じて僕の収入が増えるということはない。収入だけではなく、映画をどこの誰に売るかの権利も僕には一切ないから（つまり自分の作った映画でありながら、その映画がどんな風に扱われても僕には最終決定権がないのである）、

外国の配給会社の人間に会いたいといわれても、一体それはどういうことなの、というのがその日の僕の心境だった。

「誠意を持って映画を売りたい。ミラマックスは『パルプ・フィクション』や『ニュー・シネマ・パラダイス』をアメリカでヒットさせた会社です。他には『ピアノ・レッスン』があります。私たちの会社はアメリカの映画産業にあって、ハリウッドのメジャーとは違い、インディペンデント作品から外国映画といった今までアメリカではあまり相手にされることのなかった映画を配給して……」

爆弾ヤンキー娘の炸裂する英語をクールに右から左へさばいてくれる森吉さんは、まったくの好対照の静かな人だったが、その森吉さんが『Shall we ダンス?』を持って訪れたサンタモニカで開かれたアメリカン・フィルムマーケットで、エイミーは三月四日に『Shall weダンス?』を発見し、すぐにミラマックスの社長であるハーヴィー・ワインスタインに報告したのだという。

「朝八時半からの試写で、とても眠かったのだけれど、何か予感がして誰よりも早く観なくちゃいけないと思ったの。私の予感は当たった。とても素晴らしい映画で、特に音楽とダンスと家族っていう世界共通のテーマがあるのが最高だと思った」

ミラマックスがどんなに素晴らしい会社でも、僕の映画がそんなに誉められても、僕には何の決定権もないのだから、「それじゃ、お願いします」とはいえない。僕はただただ、にこにこしながら「ありがとう」と話を一方的に聞いているしかないのだ。それでも彼女は話し続ける。

「『シコふんじゃった。』のビデオも森吉にもらったから観るのが楽しみ。また竹中に会えるわ。彼は最高にファニー」

およそ三十分にわたって僕は彼女の称賛を聞いていた。そして配給がどうなろうとも、僕の目の前にいるエネルギッシュな爆弾ヤンキー娘が、これほど僕の映画に惚れ込んでくれたのだという事実の前に、斜めの僕はいつのまにか素直な僕になって感動していたのである。どんなに素晴らしい賞よりも目の前にいる人の素直な称賛の方が実はうれしかったりするという、監督冥利につきる瞬間を僕は十分味わいつつ、いつのまにか先住民の悲劇さえも忘れていた。まったくのんきなものだが、これだけ誉められて悪い気がするわけはないので、ミラマックスに対する僕の心証は圧倒的によくなってしまったのだけど、大映にとっては僕の意見など関係ない。エイミーはそこらへんの僕と大映との関係をよく分かっているのだろうか。

ほんの三十分のこの「大絶賛会」の後、海外配給に関する情報は僕の耳にほとんど聞こえてくることはなかった。だって関係ないからね、僕には。

『Shall we ダンス?』が六月のカンヌ映画祭の映画見本市に出されることを知ったのだって、映画祭の直前だったと思う。もちろんコンペティションとは関係ないから、僕がカンヌを訪れることもなかった。ただスポーツ新聞やら、その後会った新聞記者の人から試写は大変な人気であったと知らされ、監督としての至福の時を一瞬持っただけだ。

カンヌが終わってしばらくすると、ようやく大映から僕の映画の行き先が知らされてきた。エイミーの強い働きかけと、『赤い薔薇ソースの伝説』『ニュー・シネマ・パラダイス』『イル・ポスティーノ』(その後、ミラマックスは『トレインスポッティング』や『イングリッシュ・ペイシェント』をヒットさせた)といった外国語映画をヒットさせてきた実績から、アジア以外の全世界配給権をミラマック

スに売ることに決めたというのだ。カンヌの見本市で競合する会社があったのかどうか、どういう契約内容なのか僕は知らない。契約にいたるまでどんなことがあったのか、僕はまったく知らないのだ。だって関係ないから、誰も教えてくれないのである。

それでも僕は、少しほっとした。『Shall weダンス?』が欲しくて、オーストラリア出張からアメリカに直帰せず、突然日本にやってきたエネルギーのかたまりのようなトランジスタ・グラマー、エイミー・イズラエル。彼女の笑い顔が僕の脳裏に浮んだ。まあ、よかったのだろう。なにしろ、僕の映画を手に入れた会社の買い付け担当者の顔だけは知っているのだから。

しかし、まさかこの時から今もっともアメリカで注目されている映画会社ミラマックスとの、一年半にわたる、いやもしかしたらそれ以上になるかもしれない、長くとんでもない付き合いが始まるとは夢にも思っていなかった。

ニューヨーク／アンケートが映画を変える!?

配給がミラマックスに決まったという報告と同時にあったのが、ついてはアメリカ公開に向けて編集のやり直しを考えたいから、そのための試写に立ち会ってくれという要望だった。

「え？　オリジナルでやらないの？　吹き替え？　字幕？　どうなるの？　何を直すの？　どういう試写なの？……」

大映にぶつけた全ての疑問は、とりあえずニューヨークでミラマックスの担当者に会わなければ何

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.